

## 『チューラワンサ』における舎利

—アヌラーダプラ時代からダンパデニヤ時代における王権とサンガとのかかわり—

藪内 聡子

## 1 はじめに：『マハーワンサ』における舎利

紀元前3世紀に、アソーカ（アショーカ）王の息子であるマヒンダ長老が、スリランカに上座部の仏教を伝道した。ときのスリランカの王デーワナンピヤティッサ（在位紀元前250–前210）が仏教に帰依し<sup>1</sup>、仏教はスリランカの国教となった。そしてシンハラ人が多数を占めるスリランカにおいて、仏教は王権により保護された。マヒンダ長老の「舎利に謁するときに勝者に謁する<sup>2</sup>」との言により、仏陀の右鎖骨舎利がインドより将来され、仏教伝道時のシンハラ王デーワナンピヤティッサによってトゥーパーラーマが建立され、仏塔が仏教信仰の帰依処となった<sup>3</sup>。

筆者は藪内 [2020] において、『チューラワンサ』以前の時代を伝承する『マハーワンサ』のドゥッタガーマニー英雄伝を通して、『マハーワンサ』編纂当時のマハーヴィハーラ派の舎利信仰について考察した。紀元前2世紀、南インドからのダミラ（ドラヴィダ）人の侵略により首都アヌラーダプラを奪われ、「この私の努力は王位安泰のためではない、この私の努力は正覚者の教えこそを永久に樹立させるためである<sup>4</sup>」としてダミラ人エーラーラと一騎打ちをし、舎利つきの槍で勝利を収め、シンハラ王権を復活させたのがドゥッタガーマニー王（在位紀元前161–前137）であった。ドゥッタガーマニーは戦闘により、多くの生命を犠牲にした悔恨の念から、あらたに文字通り巨大な仏塔、マハートゥーパー建立に着手する<sup>5</sup>。舎利は、仏陀滅後に八分骨されてラーマガーマの仏塔に安置されていたものが将来された<sup>6</sup>。『マハーワンサ』においては、「マハートゥーパー建立中に、報酬を得て作業している実に多数の人々が、喜びを感じて善趣に赴いた<sup>7</sup>。」そして善逝に対する心の浄信（pasāda）だけでも、勝処に赴くことを得ると語られた<sup>8</sup>。また舎利奉安の際、舎利は仏在世時と同様の神変を顕現したことが示される。舎利龕は王の頭より上昇し、舎利箱は

<sup>1</sup> *Mhv.* ch.14. v.23.

王統年代は、Nicholas, C. W. & S. Paranavitana [1961] (pp.341–345) 記載のパラナヴィターナ新説を用いる。（なお、本書に正誤表が添付されているので注意を要する。）

<sup>2</sup> *dhātusu diṭṭhesu diṭṭho hoti jino* *Mhv.* ch.17. v.3.

<sup>3</sup> *Mhv.* ch.17.

<sup>4</sup> *rajjasukhāya vāyāmo nāyaṃ mama, sadāpi ca sambuddhasāsanasseva ṭhapanāya ayam mama/* *Mhv.* ch.25. v.17.

<sup>5</sup> *Mhv.* chs.29–31.

仏教をスリランカに伝道したマヒンダ長老により、高さ120肘（*ratana*）の塔が将来ドゥッタガーマニー王により建立されることが『マハーワンサ』において語られている。*Mhv.* ch.15. v.167.

1肘を約45cmとすると、約54mの高さとなる。これは、傘蓋を含まない本体の高さである。*Mhv.* tr. p.109, n.4.

マハートゥーパー建立の一切は、インダグッタ長老の監督のもとでおこなわれた。*Mhv.* ch.30. v.98.

杉本 [1990] p.217, 藪内 [2009] p.83.

<sup>6</sup> *Mhv.* ch.31. vv.20–24. 藪内 [2020] pp.392–393.

<sup>7</sup> *Mahāthūpe kariyamāne bhatiyā kammakārakā anekasaṃkhā hi janā pasannā sugatiṃ gatā/* *Mhv.* ch.30. v.42.

<sup>8</sup> *Mhv.* ch.30. v.43.

自ら開き、相好隋好をそなえた仏陀の姿を現し、ガンダンバ（マンゴー）樹の下なる仏陀のごとく、双神変をおこなった。その神変を見て、多くの神々、人々が悟りに達した。そして舍利は仏陀の姿を棄てて舍利箱の中におさまり、王の頭上にとどまった<sup>9</sup>。「このように世間の師主は、般涅槃されてもなお自らの遺身舍利で、種々に人々のために利益と安樂を正しくお授けになった<sup>10</sup>。」在世の善逝を供養するのと、世の利益を願って分けられた遺身舍利を供養するのと、その功德は同じであると語られた<sup>11</sup>。

仏塔の建立は、個人にとっては勝処に赴くための手段となり、国家的には、共同体の結束を通して王権の政治的支配の正統性を示す手段であった。そして王がおこなう供養の祭祀は、国王としての地位を積極的に意義付けると同時に、仏教国家としての仏教崇拜を、広く普及させるためのものとなった<sup>12</sup>。大塔は、首都アヌラーダブラにおいて、アバヤギリヴィハーラ、ジェータワナヴィハーラにも存在している<sup>13</sup>。

しかしながら、中世以降、南インドからの侵略にともなうダミラ人の増加、定住により、スリランカ北部にはダミラ人自治領が形成され、スリランカの首都は南遷した。シンハラ社会は古都アヌラーダブラを放棄せざるを得なくなる。あらたに巨大な仏塔を建立する余力が次第になくなっていく仏教王権の正統性を示すものは<sup>14</sup>、紀元後4世紀にスリランカに将来され、王宮近くの祠堂に祀られた歯舍利となった。歯舍利堂も、首都とともに移動した。サンガ組織の変遷や、政治的状況と密接に関連した歴史的過程を経て、スリランカ中世においては歯舍利が王権の象徴としての存在となるに至った。

歯舍利の将来は、『チューラワンサ』に伝承される最初の王、シリメーガワンナ王（在位紀元後303-331）の治下であった。本論は、主に『チューラワンサ』を用いながら、マハーヴィハーラ派からみた王権と歯舍利、及びサンガとのかかわりの変遷を、アヌラーダブラ時代中期から13世紀にいたるダンバデニヤ時代頃までを概観するものである。藪内[2020]の続編とも位置づけられる。

<sup>9</sup> *Mhv.* ch.31. vv.87-102.

仏陀は般涅槃の際、サッカ（インドラ神）にランカー（スリランカ）の守護を任せ、サッカはその任務をウッパラワンナ神に委任したとされる。*Mhv.* ch.7. vv.2-5.

<sup>10</sup> *Sakadhātusarīrakena cevam  
parinibbāṇagato pi lokanātho  
janatāya hitaṃ sukhaṃ ca sammā  
bahudhākāsi* *Mhv.* ch.17. v.65.

<sup>11</sup> *Mhv.* ch.30. v.100.

<sup>12</sup> 杉本 [1984] pp.232, 241.

<sup>13</sup> アバヤギリヴィハーラは、ワッタガーマニー・アバヤ王の復位期間（紀元前89-前77）に建立された（*Mhv.* ch.33. vv.79-83）。アバヤギリの塔は、建立時は平均的な大きさであり、のちに増築されて巨大なものになったと推定されている。ジェータワナヴィハーラはマハーセーナ王（在位紀元後276-303）治下に建立された（*Mhv.* ch.37. v.33）。ジェータワナの塔もこのときに建立されたと推定され、スリランカ最大のものとされる。Paranavithana [1946] pp.7-8.

アバヤギリ派とジェータワナ派は大乗仏教を受容した。アバヤギリ、ジェータワナの仏塔についての詳細は、『マハーワンサ』には伝承されていない。

<sup>14</sup> バラッカマバーフ1世（在位1153-1186）は、ポロンナルワに周囲が1300肘（*ratana*）（1肘を約45cmとすると、約585m）もの大塔を建立したとされるが、パンドゥからの捕虜であるダミラ人に建立させたため、ダミラ塔と呼ばれた。*Cv.* ch.78. vv.76-78.

## 2 主たる資料について

本論で主に扱うのは、『チューラワンサ』である。『チューラワンサ』は『マハーワンサ』の継続史であり、広義における『マハーワンサ』は『チューラワンサ』の相当箇所も含めて全体を指す。前者を『マハーワンサ』 part 1、後者を『マハーワンサ』 part 2 と称することもある。これらはスリランカの正史と位置付けられ、編纂者はマハーヴィハーラ派の比丘である。王事、仏教史上の主要な事項を、聖典語であるパーリ語を使用して編年史の形で伝承している<sup>15</sup>。広義の『マハーワンサ』は仏陀来島伝説からシリヴィッカマラージャシーハ王（在位紀元後 1798-1815）までの編年史全体を指すが、狭義においては、マハーセーナ王（在位紀元後 276-303）までの内容を指し、37 章 50 偈からなる作品となる<sup>16</sup>。本論では狭義における『マハーワンサ』及び『チューラワンサ』という呼称を使用している。『マハーワンサ』、『チューラワンサ』ともに編纂箇所ごとに中心となる英雄たる王が一人定められ、他の王よりも多くの伝承がのこされている。そしてその王のもとで仏舍利は神変を顕現し、仏教王権としての正統性を人々に明らかにするという編集上の構造がとられているのが特徴のひとつである。

狭義における『マハーワンサ』全体の編纂者は、マハーナーマ長老で、モッグッラーナ 1 世（在位紀元後 496-512）治下に編纂された。仏陀来島伝説にはじまり、マハーセーナ王（在位紀元後 303-331）までを伝承している。この部分の英雄はドゥッタガーマニー王（在位紀元前 161-前 137）で、37 章のうち、その内容は第 22 章から第 32 章までを占める。

続く『チューラワンサ』は四部にわかれて編纂されている<sup>17</sup>。本論で扱うのは第一と第二の編纂部分である。歯舍利がスリランカに将来されたのは、第一の編纂部分がはじまるシリメーガワンナ（キッティシリメーガ）王（在位紀元後 303-331）の治下である。パラッカマバーフ 1 世（在位 1153-1186）までを伝承しており、9 世紀近い年代が含まれ、37 章 51 偈から第 79 章第 84 偈までとなる。編纂者はダンマキッティ長老であり、編纂時期はパラッカマバーフ 2 世（在位 1236-1270）治下である。この部分の英雄はパラッカマバーフ 1 世であり、第 62 章から第 79 章までを占める。第二編纂部分はヴィジャヤバーフ 2 世（在位 1186-1187）からパラッカマバーフ 4 世（在位 1302-1326）までであり、第 79 章第 85 偈から第 90 章 104 偈までとなる。編纂者は未詳で、編纂時期は 14 世紀とされる。この部分の英雄はパラッカマバーフ 2 世（在位 1236-1270）で第 82 章から第 89 章までを占める<sup>18</sup>。

<sup>15</sup> Perera [1959] pp.46-53, Malalasekera [2010] pp.112-127, 藪内 [2009] pp.9-13.

<sup>16</sup> 狭義の『マハーワンサ』と同じ時代を伝承している史書に『ディーパワンサ』がある。編纂時期は『マハーワンサ』よりも早く、紀元後 4 世紀か、遅くとも 5 世紀初頭である。22 章の作品であり、編纂者は不詳で、複数の人々によるものと考えられている。Law [1947] pp.1-9, Malalasekera [2010] p.113.

<sup>17</sup> 碑文資料や考古学的な証拠との重ね合わせより、『チューラワンサ』の歴史資料としての信憑性に関しては、第 1 の編纂部分が最も信頼できるとされ、詳細であり、その次は第 2 の部分、その次は第 3 の部分と、時代が下るほど伝承も粗雑となり信頼が薄らぐとの評価がある。全体的な特徴としては、まず『チューラワンサ』の文体はインドの kāvya 文献、また alaṃkāra の韻律の法則の影響を強く受けており、それは時代が下るほど、すなわち第 1 の部分より第 2 の部分が、また第 2 の部分より第 3 の部分がその影響の度合いが大きいとされ、言語は技巧的になる。そして表現も独創性が欠如し、戦闘や祭祀などの描写は概略的となり、前の部分の固定化された形式に基づいて語られている箇所が多くなるとされる。Geiger [1930] pp.213, 228.

<sup>18</sup> 第三の編纂部分は第 90 章 105 偈から第 100 章第 301 偈までであり、ブフネーカバーフ 3 世（在位 14 世紀

編纂者は、それぞれの時代までに作成されていたマハーヴィハーラ派所伝の資料、王宮で保管されていた記録、各王がサンガに対してなした記録の綴りである善業帳 (puññapotthakāni)、目撃者による記録などに依拠しつつまとめているので<sup>19</sup>、それぞれの部分で編纂者代表としての名が残ってはいても、全くの一人だけでの著というわけではない。各編纂部分で最も分量の多い英雄伝こそ、編纂者が手を加えた可能性が多いところと考えられる<sup>20</sup>。またマハーヴィハーラ派の比丘による編纂のため、マハーヴィハーラ派からみた歴史が綴られ、アバヤギリ派やジェータワナ派に関連することは、伝承されていない、あるいは情報不足のためかごく簡単にしかふれられていない事項もある<sup>21</sup>。また編纂時期と伝承年代にずれがあるため、編纂当時の世相を過去のできごとに投影し、編纂の意図に沿うようにあとからところどころ挿入がおこなわれていると思われる箇所も存在しているため、注意して読む必要がある<sup>22</sup>。

### 3 アヌラダプラ時代：歯舍利将来

すでに述べたように、スリランカの史書『チューラワンサ』は、歯舍利がスリランカに将来されたシリメーガワンナ (キッティシリメーガ) 王 (在位 303-331) の時代からはじまっている。仏陀の最期を伝承した『マハーパリニッバーナ・スッタタ』によれば、仏陀入滅の際に、舍利は八つに分骨されたが、歯舍利はこれらには含まれず、一つは三十三天で、一つはガンダーラ市で、一つはカリンガ王の領土で、一つはナーガの王たちにより祀られていた<sup>23</sup>。『マハーワンサ』によれば、サッカ (インドラ神) が右の歯舍利を保有していたとされる<sup>24</sup>。『チューラワンサ』におけるスリランカへの歯舍利将来に関する伝承

初頭) からキッティシリラージャシーハ (在位 1747-1781) までを伝承する。編纂者はティッポトッワーウエ・シッダールタ・ブッダラクシタ (異説ではティッポトッワーウエ・スマンガラ) であり、編纂時期は 18 世紀である。24 人の支配者が登場し、キッティシリラージャシーハの伝承が第 99 章と第 100 章となる。第四の編纂部分は第 101 章 (最終章) であり、シリラージャーディラージャシーハ (在位 1780-1798) とシリヴィッカマラージャシーハ (在位 1798-1815) の伝承である。編纂者はヒッカドゥウエ・シュリースマンガラとバトワントッダーウエ・パンディタであり、編纂時期は 19 世紀である。Malalasekara [2010] p.124, Geiger [1930] p.208, Law [1947] p.17, Perera [1959] p.52, 森 [1984] p.477, n.9, n.10. 本論では PTS 出版の W.Geiger 校訂のテキストを使用している。現代もスリランカでは、政府による特別の『マハーワンサ』編纂委員会が存在し、現代史を記録して出版を続けている。すでに 1956 年までが刊行されている。橘堂 [1997] pp.15-16.

<sup>19</sup> Perera [1959] pp.51-52.

ドゥッタガーマニー英雄伝中にも puññapotthaka の語はみられる。Mhv. ch.32. v.25.

<sup>20</sup> Cv. の第一の編纂部分に関しても、ダンマキッティ以前に初期の部分はすでに書かれていて、ダンマキッティは、最後の王であるパラッカマバーフ 1 世の英雄伝を付加し、さらに全体を集成して一貫したものに編纂した可能性がある。パラッカマバーフ 1 世の英雄伝はサンスクリット文学の影響を受け、kāvyā のスタイルが採用されている。Perera [1959] p.52.

パラッカマバーフ 1 世英雄伝こそがダンマキッティの関与した箇所であると強調しているのは、Wickramasinghe, Sirima [1958] *The Age of Parākramabāhu I*, Ph.D. thesis, University of London, 1958, pp.8-33. (Liyanagamage [1968] p.5, Gornall [2020] p.33, n.18.)

<sup>21</sup> かつてはアバヤギリ派の史書も存在したが、消失したと考えられる。森 [1984] p.471.

<sup>22</sup> 歴史記録は編纂者の視線を反映するものであって、過去への関心だけでなく、むしろ編纂当時の社会の関心にこたえるものであるという観点から、その歴史を残そうとするのは誰なのかを考慮して、それぞれの史書の編纂の意図や、さらに編纂当時の政治的あるいは社会的な情勢、サンガの様態及び思想などを探る研究も発表されてきている (藪内 [2020] p.389). Gornall [2020], Scheible [2016], Walters [2000] など。中世のスリランカの史書の編纂については、Berkwitz [2004] .

<sup>23</sup> DN. II. p.167. Strong [2004] pp.190-191.

<sup>24</sup> Mhv. ch.17. vv.14-15. しかし、歯舍利に関して『ディーパワンサ』には言及がない。

は、以下の通りである。

そ（の王）の9年目に、あるバラモンの女性が大聖の歯舍利を受け取って、カリンガからここにもたらした。『歯舍利史<sup>25</sup>』に説かれた規定によって、彼（王）はそれを恭敬の心で賜り、最上の敬意を払って 清浄な水晶のような籠におさめて、デーワナーンピヤティッサによって王邸の敷地内に建立された法輪（*dhammacakka*）と称される屋舎に、王は奉遷した。それ以来その屋舎は、歯舍利堂（*dāṭhādātughara*）となった<sup>26</sup>。心満ち足りた王は90万を投じて、その後、歯舍利の大祭をおこなった。毎年アバユッタラ（アバヤギリ）寺院に遷して、その供養の規定をかくの如くにおこなうべきよう命じた<sup>27</sup>。

この内容はわずか6偈にとどまっている。マハーヴィハーラ派の上座部では、舍利は仏陀そのものと受け止められており、歯舍利将来は画期的な出来事であったと想像されるが<sup>28</sup>、トゥーパーラーマやマハートゥーパ建立のための舍利伝来、仏陀成道の菩提樹の将来などに比べると、非常に少ない分量となっている。

13世紀に編纂されたとされる『ダーターワンサ』には、バラモンの女性が最初に訪問した寺院はアヌラーダプラの北西に位置するメーガギリ（Meghagiri）であり<sup>29</sup>、メーガギリはアバヤギリ派であったと推定されている<sup>30</sup>。スリランカに歯舍利が到着してから約1世紀のちにスリランカを訪れた中国僧法顕は、歯舍利がアバヤギリから運ばれる祭祀の様子を記録に残している<sup>31</sup>。歯舍利はアバヤギリで3ヶ月間展示されたのちに、王宮近くの歯

<sup>25</sup> シンハラ語の『ダラダーワンサ』を指すと推定される。 *Dāṭh. ed. by Law, B. C. p.ii*. 『ダラダーワンサ』については、本稿5節を参照。

<sup>26</sup> この歯舍利堂は王宮の隣に位置していたことが考古学的に確かめられている。 Hocart [1931] p.50

<sup>27</sup> *navame tassa vassamhi dāṭhādātum mahesino  
brāhmaṇi kāci ādāya Kāliṅgamhā idh' anayi./  
dāṭhādātussa vamsamhi vuttana vidhinā sa taṃ  
gahetvā bahumānena katvā saṃmānam uttamaṃ/  
pakkhipitvā karaṇḍamhi visuddhaphaḷikubbhave  
Devānaṃpiyatissena rājavatthumhi kārīte/  
dhammacakkavhaye gehe vaḍḍhayittha mahīpati  
tato paṭṭhāya taṃ gehaṃ dāṭhādātugharaṃ ahu./  
Rājā sataśahassānaṃ navakaṃ puṇṇamānaśo  
vissajjetvā tato' kāsī dāṭhādātumahāmaṃ/  
anusamvaccharaṃ netvā vihāraṃ Abhayuttaraṃ  
tassa pūjāvihāraṃ kātum evarūpaṃ niyojayi./ Cv. ch.37. vv.92-97.*

アバヤギリ（Abhayagiri）は、アバユッタラ（Abhayuttara）とも称される。

18世紀まで編纂が引き継がれてきたとされるシンハラ語の『ラージャーワリヤ』によれば、カリンガ国のグハシーワと称される王が右の犬歯の舍利を保有していたが、宣戦状態に入ったため、自分の娘のランマリーと自分の甥のダンタに対して、友人であるスリランカのシリメーガワンナ王にこの歯舍利を届けるように依頼し、彼ら二人は行者になりすましてトゥットゥクディヤからスリランカに船出したとされる。 *Rjv. tr. p.53. Hocart [1931] p.2.* この伝承には種々の異説もある。

<sup>28</sup> *dāṭhā* の複合語を名とする諸王がアヌラーダプラ時代には存在する。 *Dāṭhāpabbuti*（在位 535）、*Dāṭhōpatissa I*（在位 643-650）、*Hatthadāṭhā*（*Dāṭhōpatissa II*）（在位 659-667）がその例である。

<sup>29</sup> *Dāṭh. ch.5. vv.7, 9, 12.* バラモンの女性は大乘仏教徒であり、それゆえ最初にアバヤギリの比丘と接触したと考えられている。

<sup>30</sup> Rahula [1956] p.97. n.3.

メーガギリを現代のイスラムニ寺院と同定する説もあるが、これを否定する研究者のほうが多い。 Herath [1994] pp.41-45. Seneviratna [2010] p.18

<sup>31</sup> 『高僧法顕伝』（大正蔵 51, pp.864-865）。

舎利堂に戻された。しかし5世紀頃に編纂されたパーリ三蔵の註釈書類には、歯舎利に関する記述はない。おそらく歯舎利がアバヤギリで管理されていたからであろう。

その後アヌラーダプラ時代、『チューラワンサ』においては、ダートゥセーナ（在位 459-477）<sup>32</sup>、アッガボーディ1世（在位 575-608）<sup>33</sup>、モッガッラーナ3世（在位 618-623）<sup>34</sup>、セーナ2世（在位 853-887）<sup>35</sup>、セーナ4世（在位 954-956）<sup>36</sup>、マヒンダ4世（在位 956-972）治下に<sup>37</sup>、歯舎利に対する供養、歯舎利堂の修繕の様子が伝承されている。歴代の王すべてに関して歯舎利に関する伝承があるわけではないが、これらの伝承から、アヌラーダプラ時代を通じて王宮の近くに歯舎利堂が存在していたことが推定される。

なお『チューラワンサ』には、ポロンナルワ時代がはじまるヴィジャヤバーフ1世（在位 1055-1110）の王事の伝承の直前に、マーナワンマ王時代の歯舎利に関する伝承が唐突に挿入されている。カッサパ2世（在位 650-659）の息子であるマーナワンマ王（在位 684-718）は、片目を失い、自分は王にはふさわしくないと考えて弟のマーナに王位を譲り、アバヤギリの寺院であるウッタロームーラ（Uttaromūla）にて出家、受戒した。なおマハーヴィハーラ派の律においては、不具者は出家不可能であるため<sup>38</sup>、アバヤギリにて出家したと考えられる。弟のマーナはウッタロームーラに房舎（pariveṇa）を建立し、召使 600 人を比丘として兄マーナワンマに付き添わせ、またマーナワンマに従う人々を、歯舎利の管理者（dāthādhāturakkhiya）にしたとされる<sup>39</sup>。

#### 4 ポロンナルワ時代：歯舎利灌頂

##### 4.1 ヴィジャヤバーフ1世

アヌラーダプラ時代後期の9世紀には南インドのパンドゥから、10世紀にはチョーラからのスリランカへの侵略があった<sup>40</sup>。チョーラ勢力を打倒して首都を奪回したのはシンハラ人キッティであり、ヴィジャヤバーフ1世（在位 1055-1110）として即位する<sup>41</sup>。キッティは首都アヌラーダプラ奪回のあと、アヌラーダプラでまず灌頂式をおこない<sup>42</sup>、その

7世紀に存命した玄奘も、歯舎利堂は王宮の近くにあったことを報告している（『大唐西域記』大正蔵 11. p.934 上）。Rahula [1956] p.131.

<sup>32</sup> Cv. ch.38. vv.70-72.

<sup>33</sup> Cv. ch.42. v.33.

<sup>34</sup> Cv. ch. 44. v.45.

<sup>35</sup> Cv. ch.51. v.22.

歯舎利の大祭において、王が宝殿（Ratanapāsāda）に上っていることから、このときにも歯舎利がアバヤギリで管理されていることが確かめられる。Cv. ch.53. v.17.

<sup>36</sup> Cv. ch.54. v.5.

<sup>37</sup> Cv. ch.54. v.45.

<sup>38</sup> Vin. I. p.91

<sup>39</sup> Cv. ch.57. vv.4-23. ウッタロームーラについては、Gunawardana [1979] pp.283-290,

藪内 [2009] pp.201-219.

<sup>40</sup> Cv. chs.50, 55.

<sup>41</sup> 藪内 [2009] pp.316-320.

チョーラ追放は 1070 年のこととされる。Nicholas [1960b] p.432.

ポロンナルワ時代においては、王の英雄性がより強調されている。スリランカの王の名が、アヌラーダプラ時代においては、Buddhadāsa, Upatissa, Aggabodhi, Saṃghatissa, Moggallāna, Mahinda, Kassapa など、仏教徒の伝統に密接に関連しているものであったが、ポロンナルワ時代の王にはどれも仏教徒とは関係のない名が付けられ、Vijayabāhu, Jayabāhu, Vikkamabāhu, Virabāhu, Gajabāhu, Parakkamabāhu, Nissānkamalla などすべて英雄の特質を強調したものとなっている。Pathmanathan [1982] p.126.

<sup>42</sup> Cv. ch.59. v.8.

後首都をポロンナルワへと移動し、都城を築いた<sup>43</sup>。これらの南インドからの侵略でサンガは衰退したが、ヴィジャヤバーフ1世はミャンマーの王アヌルッタ（在位 1044-1077）に遣いを出し、長老たちを迎えてサンガ復興のための受戒をおこなった。ポロンナルワに数多くの寺院が建立され、マハーヴィハハラ派、アバヤギリ派、ジェータワナ派の三派のサンガが復活した<sup>44</sup>。

その後ヴィジャヤバーフ1世は、費用をかけて美しい歯舍利堂を新しい都ポロンナルワに新築し、大祭を行なったことが『チューラワンサ』に伝承される。碑文によれば、この歯舍利堂には鉢舍利も祀られており、ヴィジャヤバーフ1世はこの歯舍利堂で再度灌頂を行ったとされる<sup>45</sup>。しかし『チューラワンサ』には、歯舍利堂での灌頂に関しては述べられていない。歯舍利堂での灌頂は、これ以前には記録がないことから、スリランカの王としてははじめてのことであったと推定される。また同碑文には、歯舍利の管理は、ヴィジャヤバーフ1世の治下においてもアバヤギリ所属のウッタロームーラが統括していることを記している<sup>46</sup>。そのためヴィジャヤバーフ1世はウッタロームーラの敷地内にも歯舍利堂を建立した。前節でふれたように、『チューラワンサ』には、マーナワンマ王がウッタロームーラで出家したことが唐突にヴィジャヤバーフ1世の伝承の直前に述べられているが、それはヴィジャヤバーフ1世がマーナワンマにまで系譜として遡ることができる人物だからであり<sup>47</sup>、11世紀当ても、歯舍利は、かつて王族が出家して所属したウッタロームーラとの結びつきが強かったことが想像される。ウッタロームーラの長はムガラン(Mugalan)であり、彼は王師(rājaguru)であった<sup>48</sup>。

また同碑文によれば、ヴィジャヤバーフ1世の治世において、歯舍利の護衛は、王と契約雇用されたダミラ人の傭兵であるウェライッカーラ(Veḷaikkāra)に任されていた<sup>49</sup>。

<sup>43</sup> Cv. ch.60. vv.2-3. ヴィジャヤバーフ1世がアヌラダプラより南のポロンナルワに首都を定めた理由は、南インドからの進撃に対して態勢を整える時間がより保てること、さらにスリランカ南部からの反撃に対しては、マハウェリ川の近くであるために有利であることがあげられる。Nicholas [1960b] p.428.

<sup>44</sup> Cv. ch.60. vv.4-10, EZ. II. p.253.

ミャンマーでの呼称はアノーヤター王である。スリランカ国外に避難していた比丘たちが多数戻ってきたことも推定される。藪内 [2009] pp.322-323.

<sup>45</sup> Cv. ch.60. v.16, EZ. II, pp.252-254. そしてサンガの要請により仏教を保護するために王冠を付けたことが記されている。EL18, pp.336-338.

Uttoruḷa-mūla, Uturuḷa-mūla, Uttaromūla, Uturoḷmuḷa は同一のものを指す。

鉢舍利については、トゥーパーラーマ建立の際に、マヒンダ長老の指示により沙弥のスmanaが右鎖骨舍利を鉢舍利に満たして将来したことが伝承される。Mhv. ch.20. vv.9-10.

<sup>46</sup> セーナ2世（在位 853-887）は、マハーヴィハハラ派のマハートゥパーバで灌頂をおこなったことが伝承される。Cv. ch.51. v.82.

<sup>47</sup> Cv. ch.57. vv.24-44. Nicholas [1960a] p.421.

<sup>48</sup> Gunawardana [1979] p.288. ムガランはモグガッラーナ(Moggallāna)のこである。文法学者としても著名である。Paranavitana [1960] p.564.

おそらくヴィジャヤバーフ1世のポロンナルワでの即位から、歯舍利は王宝とともに王の灌頂に必須のものとして認識されるようになったのではないかと予想される。なぜなら、歯舍利を有していなかった次のヴィッカマバーフ1世（在位 1111-1132）は、正式な灌頂を受けていないとみなされていたからである。Cv. ch.61. v.47.

また歯舍利を有していなかったガジャバーフ2世（在位 1132-1153）については、『チューラワンサ』においては灌頂を受けていないとは伝承されていないが、Rjv. に伝承されている王のリストにガジャバーフ2世の名はないことから、やはり灌頂を受けていない可能性は高いと考えられる。藪内 [2009] p.91.

ヴィジャヤバーフ1世の建立した歯舍利堂の場所は、考古学的に同定されている。Herath [1994] p.58.

<sup>49</sup> EZ. II. pp.253, 255, EL18, pp.336-338. 傭兵たちは、歯舍利堂の管理のために、1veilの土地と、各連隊から一名の従者を割り当てられた。Paranavitana [1960] p.571.

それ故契約者たる王自身が掠奪者となったときは、護衛は無力となる。ヴィジャヤバーフ1世の死後、その息子のヴィッカマバーフ1世は、鉢舎利や歯舎利の供養のために施された摩尼珠、真珠をはじめ、栴檀香、沈香、樟腦及び黄金造りの数多の像を掠奪した<sup>50</sup>。

南インド諸国とスリランカとの関係は流動的である。アヌラーダプラ時代後期から、チョーラと対抗するため、スリランカは、パンドゥ、カリंगाと三国同盟を結び、外交政策としてこれらのインド諸国から妃を迎えた<sup>51</sup>。王位継承者であった息子のヴィッカマバーフ1世（在位 1111-1132）は、カリंगा出身の妃との息子であり、仏教徒ではなかった可能性が高い。それまで歯舎利、鉢舎利は王宮の近くに安置されていたが、このときヴィッカマバーフ1世の暴挙をおそれて、両舎利は比丘たちによりスリランカ南部のローハナに移動された<sup>52</sup>。

#### 4.2 英雄パラッカマバーフ1世

ヴィッカマバーフ1世以降の内政混乱は、ヴィジャヤバーフ1世にシンハラ人の妃が存在しなかったためである。王位継承問題のために内政は不安定な状態が続いた。この状態に終止符を打ったのがパラッカマバーフ1世（在位 1153-1186）である。パラッカマバーフ1世誕生当時、スリランカ島内の統治は分裂しており<sup>53</sup>、北部のラージャラッタを統治していたガジャバーフ<sup>54</sup>、さらに同じくラージャラッタの支配を野望するシリワッラバの

ウェライッカーラの護衛は、ムガラン（モッグッラーナ）の指示ということになる。Herath [1994] p.67. この傭兵たちは、ヴィジャヤバーフ1世（在位 1055-1110）によって新たに南インドから獲得されたのではなく、おそらくチョーラの侵略の時代以前からスリランカに住み着いていたものと考えられる。アヌラーダプラ時代後期、カッサパ4世（在位 898-914）の治下の碑文においても、護衛である Velakkā (Velaikkāra) についての言及があるからである (EZ. III. p.276)。ダミラ人の傭兵たちは、アヌラーダプラ時代後期頃から、王位継承抗争のためにシンハラ王に雇用され、あるいは南インドからの侵略にともない来島してとどまり、スリランカ島内で増加傾向にあった。従って、この傭兵たちは、この時代にヴィジャヤバーフ1世により南インドから獲得されたのではなく、おそらくチョーラの侵略の時代以前からスリランカに存在していたものと考えられる。藪内 [2009] p.320.

<sup>50</sup> Cv. ch.61. vv.56-57.

寺院の富を掠奪している『チューラワンサ』の伝承から、ヴィッカマバーフ1世は仏教徒ではないと推測されるが、そのことを明確にする伝承は『チューラワンサ』には存在しない。ヴィッカマバーフの母親であるカリंगा国の女王ティローカスンダリーは、寺院内での規則を破り、その罪でもってあらゆる待遇を剥奪され、夫ヴィッカマバーフによって都の外に追放されたことが『チューラワンサ』に伝承される。Cv. ch.60. vv.54-55.

ブドゥムッテーフから発掘された碑文によれば、ヴィッカマバーフによって建立されたシヴァの神祠が、ヴィッカマバーフに因んで Calāmēga-Īśvara と名づけられている。EZ. III. pp.311-312.

<sup>51</sup> Cartman [1957] p.24.

スリランカにクシャトリアにあたる階層がないことから、王が地位の正統化のために権威付けを求めて王妃をインドから迎えたという理由も考えられる。鈴木 [1996] p.860.

スリランカの最上カーストはゴイガマ（農耕民）である。

<sup>52</sup> Cv. ch.61. vv.58-61.

<sup>53</sup> パラッカマバーフ1世誕生当時、ヴィッカマバーフ1世の息子であるガジャバーフ2世が首都ポロンナルワを含む北部ラージャラッタを支配し、ヴィジャヤバーフ1世の妹のミッターとパンドゥの王子との間の三人の子マーナーバラナ、キッティシリメーガ、シリワッラバがスリランカ西南部のダッキナデーサと東南部ローハナの主権を分割していた (Cv. ch.59. v.42; ch.61. vv.21-25)。パラッカマバーフ1世はマーナーバラナの息子であった (Cv. ch.62. vv.40-41, 52)。父マーナーバラナは程なく亡くなり (Cv. ch.62. v.67)、息子のいなかった叔父キッティシリメーガのもとで養育され (Cv. ch.63. v.44; ch.64. vv.1-5)、ダッキナデーサにとどまることに満足せず、次第に全島統一の志を有するようになる。

<sup>54</sup> Cv. ch.70.

息子のマーナーバラナ<sup>55</sup>（パラッカマバーフ 1 世の父とは別人）との戦闘に及んだ<sup>56</sup>。パラッカマバーフ 1 世は、ガジャバーフの逝去後（第 71 章）、そしてマーナーバラナの逝去後（第 72 章）とあわせて二度の灌頂式をおこなっているが<sup>57</sup>、このとき『チューラワンサ』では歯舍利に対する言及はない。『チューラワンサ』第 73 章において、パラッカマバーフ 1 世が推進したマハーヴィハーラ派の受戒による全サンガの浄化と統一が伝承されるが、歯舍利と王権との関係性が『チューラワンサ』の描写として著しい変化を見せるのは、このあとのことである。歯舍利、鉢舍利は当時スリランカ南部のローハナ地方に存在し、『チューラワンサ』第 74 章において、ローハナで両舍利を管理していたマーナーバラナの母スガラーとの戦闘が描写され、ついにパラッカマバーフ 1 世の勝利と両舍利獲得が達成される。

いかにしても実に並ぶもののない宝というものは、法主である歯、鉢両舍利尊である。私もまた大事な多くの財を費やして、鎧や武器とともに常に戦士を蓄え、患いなきこの最上のランカー島を統べ合わせても、私になした努力と野望は成果なきものとなるだろう。もしまた種々の宝の光によって輝いている高価な髻によって私の頭を飾っても、大聖である歯、鉢両舍利尊との最上の接触をまってこそ聖化されるはずである<sup>58</sup>。

このパラッカマバーフ 1 世の言葉を通じて、「世間と仏教の興隆の因である王権樹立<sup>59</sup>」が歯舍利によって聖化され、まさに歯舍利が仏教王権の象徴たる存在であることを、『チューラワンサ』の編纂者が認めたことになる。しかし、サンガ統一の詳細が内容的には第 73 章と重複しながら、再度『チューラワンサ』第 78 章に伝承される。この事実は何を意味しているのだろうか。パラッカマバーフ 1 世によるサンガ改革はいつのことであったのか。同王が発布したカティカーワタにはワッタガーマニー・アバヤ治下の最初の分裂から 1254 年後のこととされ、この分裂は仏紀 454 年とされているので、パラッカマバーフ 1 世即位後 12 年目のことになる<sup>60</sup>。歯舍利奪回は、14 世紀初頭に編纂された『ダラダー・

<sup>55</sup> Cv. ch.64. v.19.

<sup>56</sup> Cv. chs.71-72.

<sup>57</sup> Cv. ch.71. vv.19-21; ch.72. vv.310-312.

ガジャバーフとの戦闘においてパラッカマバーフ 1 世は優勢ではあったが、ガジャバーフの要請を受けて三派（マハーヴィハーラ派、アバヤギリ派、ジェータワナ派）の比丘たちが仲介に入り、子や弟もいない年老いたガジャバーフとの争いはやめて和解するように、パラッカマバーフ 1 世を説得した。比丘たちはパラッカマバーフ 1 世の王権樹立を確信していた。 Cv. ch.70. vv.327-336.

マーナーバラナは、パラッカマバーフ 1 世を怖れるがために生じた病で亡くなった。 Cv. ch.72. v.301.

<sup>58</sup> asādhāraṇabhūtaṃ hi ratanaṃ nāma sabbathā  
duve dāṭhāpattadhātubhadantā dhammasāmino./  
vissajjetvā mayā cāpi sārabhūtaṃ bahuṃ dhanam  
sasaṃnāhāyudhe yodhe rāsikatvā niranāraṃ/  
sādhentena niraṭaṅkaṃ Laṅkāḍīpaṃ imam varaṃ  
kato mayā ca vāyāmo kāmaṃ hessati nipphalo./  
nānāratanaṃasmīhi pajjalantena molinā  
mahagghena pi ce mayhaṃ uttamaṅgaṃ alaṃkataṃ./  
dvinnam dāṭhāpattadhātubhadantānaṃ mahesino  
pavittito nāma bhava varasaṃphassayogato./ Cv. ch.74. vv.103-107.

<sup>59</sup> lokasāsanaṃvuddhihetukaṃ rajjasādhanam Cv. ch.70. v.334.

<sup>60</sup> Paranavitana [1960] p.569. *The Katikāvatas*, pp.37, 127.

プージャーワリー』によれば、即位後4年目のこととされる<sup>61</sup>。これらが正しいとすれば、順序としては、歯舍利奪回後にサンガ統一がなされたということになる。『チューラワンサ』の伝承には混乱があるが、これが意味することは、マハーヴィハラー派にとって、パラッカマバーフ1世治下の最大の関心事がマハーヴィハラー派の受戒によるサンガ統一であったのであり、『チューラワンサ』第73章は当時の伝承がそのまま入っている可能性がある。そして『チューラワンサ』第一部分編纂時である13世紀、パラッカマバーフ2世（在位1236-1270）治下、マハーヴィハラー派にとっても歯舍利の重要性がより意識されてきたため、別の経路で流布された歯舍利奪回の伝承（第74章）と、さらに詳細なサンガ統一の伝承（第78章）とが付加されたことが推測される<sup>62</sup>。また、13世紀においてサンガの和合が保たれていたのであり、その状態をパラッカマバーフ1世のサンガ統合の成果に連なるものとして伝承していることになろう。サンガの改革が進み、組織が再編されて階層性が成立していることは、パラッカマバーフ2世治下に発布されたダンパデニ・カティカーワタにより確認することができる<sup>63</sup>。

## 5 『ダーターワンサ』の編纂

パリー語の『ダーターワンサ』（歯舍利の歴史）が13世紀に編纂されていることにも留意したい。パラッカマバーフ1世の妃のリーラーワティーの治下、将軍パラッカマの要請によるものとされる<sup>64</sup>。歯舍利がスリランカに将来されるまでのインドでの出来事が主たる内容であり、歯舍利がスリランカに将来されたシリメーガワンナ王（在位紀元後303-331）治下に編纂されたとされるシンハラ語の『ダラダーワンサ』に基づくものである<sup>65</sup>。『ダーターワンサ』の編者はダンマキッティであり、パラッカマバーフ1世治下のサンガ改革時に首座となった、ディンブラーガラ所属の森林住比丘マハーカッサバの孫弟子にあたる<sup>66</sup>。サンガ統合後、マハーカッサバの弟子のサーリップッタが全サンガの最高責任者であるマハーサーミの称号をはじめて王より授与されたとされるが<sup>67</sup>、『ダーターワンサ』の編者のダンマキッティはこのサーリップッタの弟子であり、王師（*rājaguru*）で

カティカーワタは、律蔵やその註釈書類を主に引用して、時代の必要性に応じて新たに制定したサンガ規約である。一寺院の規約である *Vihāra Katikāvata* と、サンガ全体が守るべき *Sāsana Katikāvata* がある。*Sāsana Katikāvata* は王の名で発布された。序に歴史記述がある。橘堂 [2002] pp.304-305。

<sup>61</sup> Parānavitana [1960] p.573. 『ダラダー・プージャーワリー』はパラッカマバーフ4世（在世1302-1326）治下に編纂され、その後増広されたものである。Perera [1959] p.56。

<sup>62</sup> サンガ改革自体が、長期間にもわたっていたということも考えられる。

<sup>63</sup> サンガ最高責任者（マハーサーミ、のちにサンガラージャと称される）を中心とし、大きくは、森林住比丘・村落住比丘という枠組みが成立する。 *The Katikāvatas*, pp.64-101, 135-161. Cv. ch.84. vv.1-31. 藪内 [2009] pp.148-160。

<sup>64</sup> リーラーワティーは、パラッカマバーフ1世の逝去後、三度（1197-1200, 1209-1210, 1211-1212）即位している。

<sup>65</sup> *Dāṭh.* ed. by Law, B. C. p.ii, Malalasekera [2010] pp.51, 185-186, Perera [1959] p.55. 『ダラダーワンサ』は現存していない。

<sup>66</sup> パラッカマバーフ1世治下のサンガ改革については、藪内 [2009] pp.143-148, 192-193。

『チューラワンサ』の第一編纂部分の編者もダンマキッティとして知られているが、ダンマキッティという名を有している長老は複数存在する（Hettiaratchi [1960] p.771）。『ダーターワンサ』を編纂した長老と同一人物だとも考えられている（Parānavitana [1960] p.587, 橘堂 [1997] p.15）。

またサンガ組織の変容、森林住比丘の台頭と相まって、仏陀直弟子であり、第一結集の首座を務めたマハーカッサバの歯舍利が、ダンパデニヤ時代のスリランカにおいて重要なものとして認識されている。マハーカッサバの歯舍利はビーマティッタ（*Bhīmatittha*）寺院に祀られていた。 Cv. ch.85. vv.80-81。

<sup>67</sup> *The Katikāvatas*, pp.47, 139。

あった。『ダラダーワンサ』の伝承はアバヤギリが保持していたと考えられるが、『ダーターワンサ』においても、『マハーワンサ』と同様、仏陀来島伝説が挿入され、その際マハーヴィハーラ派のトゥーパーラマ及びマハートゥーバが将来建立される地を仏陀が定に入り浄めたことが挿入されている<sup>68</sup>。従って『ダーターワンサ』は、マハーヴィハーラ派の伝承に沿わせる形で編纂されているといえよう。ダンマキッティは、『ダーターワンサ』編纂の理由として、『マハーワンサ』には歯舍利に関する伝承が非常に少なく、またシンハラ語の『ダラダーワンサ』の偈は長く、かつ理解しづらいためと述べている<sup>69</sup>。

『チューラワンサ』には、パラッカマバーフ1世の三派のサンガ統合の事業は、「王権樹立の苦悩よりも二倍も激しい疲労に耐えつつ、大智者である大地の王は和合をなして、五千年の間清浄であるよう、勝者の教を乳水の如くにした<sup>70</sup>」という表現で語られている。このサンガ和合はどの程度維持されていたのか。『チューラワンサ』には伝承されていないが、カリング出身の王ニッサンカマツラ（在位 1187-1196）治下の碑文に、同王がこれら三派を統一したという記述が再びあらわれる<sup>71</sup>。パラッカマバーフ1世統合ののちにも、サンガの中に異なる意見や対立があり、宗派的な敵対関係が生じていた可能性もある。それ故王師によるこの時期のパーリ語による『ダーターワンサ』の編纂は、歯舍利を軸としたサンガの和合を意図していたものとも考えられる。

## 6 ダンバデニヤ時代：歯舍利神変

パラッカマバーフ1世の英雄伝を含む『チューラワンサ』の第一編纂部分が、13世紀のパラッカマバーフ2世（在位 1236-1270）治下に編纂されていることをもう一度考えてみよう。パラッカマバーフ2世治下に発布されたダンバデニ・カティカーワタの冒頭の歴史著述の部分においては、ヴィジャヤバーフ（3世）は、世間と仏教を破壊したダミラ軍を恐れてスリランカ東南部のマーヤーラッタに避難し、そこで歯舍利、鉢舍利を手中に収め、そして息子のパラッカマバーフ（2世）が、ダミラ人、ケーララ人、ジャワ人たちの暴動を平定したとある。『チューラワンサ』によれば、このダミラ人、ケーララ人はマーガ（在位 1215-1236）、ジャヤバーフの軍隊であり、ジャワ人はチャンダバーヌの軍隊であった<sup>72</sup>。

パラッカマバーフ1世に後継者はいなく<sup>73</sup>、再び内政は不安定となり、王位継承の内部抗争に乗じてマーガ、チャンダバーヌの侵攻があった。『チューラワンサ』ではマーガはカリングの系譜につらなる人物でカリングから来襲したが、マーガ自身はダミラ人とも伝承

<sup>68</sup> *Dāth.* ch.2. vv.26-27; *Mhv.* ch.1. vv.81-82. 敷内 [2020] p.391.

<sup>69</sup> *Dāth.* ed. by Law, B. C. p.ii.

<sup>70</sup> *rajjasādhanadukkhā pi diguṇaṃ kilamathaṃ bhusaṃ  
anubhonto mahāpañño samaggaṃ katva bhūpati/  
pañcavassasahassāni yathā suddhaṃ pavattati  
tathā khīrodakibhūtaṃ akāsi jinasānaṃ.* / *Cv.* ch.73. vv.21-22.

<sup>71</sup> *EZ.* I. pp.131-132, 134, *EZ.* V. pp.433, 434. ニッサンカマツラ治下にカティカーワタも発布されているが、それは一部現存しているのみである。 *EZ.* II, pp.96-98.

<sup>72</sup> *The Katikāvatas*, pp.47, 138-139; *Cv.* ch.83. vv.18-19, 36

<sup>73</sup> そのため、パラッカマバーフ1世の甥であるヴィジャヤバーフ2世（在位 1186-1187）がカリングより迎えられて養育され（*Cv.* ch.80. v.1）、カリング王朝期がはじまった。ヴィジャヤバーフ2世ののちに即位したニッサンカマツラ（在位 1187-1196）の治下にスリランカの政情は一応の秩序をみたものの、その死後の諸王の統治期間は、長くて数年、短いと数日間というものであった。 *Cv.* ch.80.

されている<sup>74</sup>。村々は進撃され、資産家は捕縛されて財物が掠奪された。チューティヤは破壊され、サンガに属するあらゆるものも強奪された<sup>75</sup>。マーガ侵略の際には、都ポロナルワに奉安していた歯舍利、鉢舍利を、ワーチッサラ長老たちはスリランカ西南部マヤーラッタ<sup>76</sup>（ダッキナデーサ）のコットゥマラ山に移動させて地中に隠し、自分たちは仏教の永続のために、スリランカの守護を探し求めて、バンドゥ、チョーラなどの他国に赴いていたという<sup>77</sup>。ワーチッサラの所属については『チューラワンサ』にはあえて伝承されていないが、パラッカマバーフ2世治下に編纂された『ハッタワナガッラヴィハーラワンサ』によれば、ワーチッサラはウッタロームーラの長であった。ウッタロームーラ自体は当時も存続して、歯舍利の管理を引き続き担っていたとみられる<sup>78</sup>。ヴィジャヤバーフ3世（在位1232-1236）は歯舍利を険しい岩山のピラセーラに安置し、首都はポロナルワよりさらに南のダンバデニヤに定めた。臨終の際には、息子のパラッカマバーフ2世の教育をときのマハーサーミ（サンガ最高責任者）であるサンガラッキタに委任し、さらにサンガと歯鉢両舍利をパラッカマバーフ2世に譲渡することによって王位を継承した<sup>79</sup>。

『チューラワンサ』におけるパラッカマバーフ2世の出陣の場面をみてみよう。パラッカマバーフ2世はダンバデニヤで即位すると、歯舍利をピラセーラから首都ダンバデニヤに遷し、歯舍利供養の大祭を行ったのちに、マーガ、ジャヤバーフとの戦線に赴く<sup>80</sup>。歯舍利は、かつてドゥッタガーマニー王（在位紀元前161-紀元前137）がマハートゥーパ建立の際に顕現した如き神変を、この歯鉢両舍利大祭にも示したことを『チューラワンサ』は伝承する<sup>81</sup>。

「われらの世尊は覚者にして天神中の天神（devadeva）、大威神力者であり、牟尼は三度このランカー島に降臨された<sup>82</sup>。…それ故ランカー（島）は邪見の王たちの支配のもとに確立することなく、正見を有する王たちの支配のもとに正しく存続する<sup>83</sup>。…またドゥッタガーマニーという名声高きアバヤ大王は、チョーラ人エー

<sup>74</sup> Cv. ch.80. vv.58-59; ch.83. vv.19-20.

<sup>75</sup> Cv. ch.80. vv.58-70.

<sup>76</sup> Cv. の第二編纂部分より、スリランカ西南部のダッキナデーサ（Dakkhiṇadesa）は、マヤーラッタ（Māyāraṭṭha）に呼称が変化している。

<sup>77</sup> Cv. ch.81. vv.17-21.

マーガの侵略以降、チョーラとの外交政策にも変化が生じている。パラッカマバーフ2世はサンガ改革のために、チョーラから長老を招いている。Cv. ch.84. vv.9-10.

<sup>78</sup> Herath [1994] p.66, Hvv. p.30. Uttaramūla は Uttaramūla と同一の組織を指す。Panabokke [1993] pp.180-181. ウッタロームーラは15世紀頃まで存続していたと推測される。

Hvv. の編者は未詳であるが、マハーサーミであったアノーマダッシの弟子であるとされる。Hettiaratchi [1960] p.771. マハーサーミについては、藪内 [2009] pp.152-153.

<sup>79</sup> Cv. ch.81. vv.33-39, 76-78.

<sup>80</sup> Cv. ch.82. vv.6-7.

パラッカマバーフ2世は一時的に島北部のラージャラッタを治めたとされるが、徐々にダミラ人の自治領が形成されていく過程については、Liyanaḡamage [1968] pp.160-178, 藪内 [2009] p.333-338.

<sup>81</sup> Mhv. ch.17. vv.46 ff.

<sup>82</sup> amhakaṃ bhagavā buddho devadevo mahiddhiko

tayo vāre samāgantvā Laṅkādiṇaṃ imaṃ muni./Cv. ch.82. v.17.

<sup>83</sup> tasmā kudiṭṭhirājūnaṃ vase Laṅkā na tiṭṭhati,

sammādiṭṭhikarājūnaṃ vase sammā pavattati./Cv. ch.82. v.19.

ラーラに勝利して世間と仏教を守護した<sup>84</sup>。…ヴィジャヤバーフ大王もまた戦闘においてチャーラ人やダミラ人たちを敗走させ、世間と仏教を守護した。今また精舎をはじめとし、大師の教をも滅ぼして、このパティッターラッタ<sup>85</sup>（ラージャラッタ）に増長して住んでいる二人のダミラ人、マーガ王とジャヤバーフを征服し、我は、世間と仏教を興隆させようと祈誓する。これも真実語である<sup>86</sup>。…正覚者の入滅後に現れた、大威神力を具えたダンマアソーカをはじめとする王たちは、種々の神変、化作された正覚者のお姿などを拝して、そうして各自の命を正しく果報あるものとなした<sup>87</sup>。…そのとき以来今まで、主の威神力により存在する舍利や、存在する受用物、それらすべて世間に残存する遺品は、この世で神変をなしている<sup>88</sup>。…またもしも私も、いかにしても信仰を有する過去の大英雄なるかの大地の護者らの中に含まれるとするならば、もしも恐ろしい戦争において、敵を撃滅し、世間と仏教の興隆を行うとするならば、この歯舍利は輝かしい神変を今我に確かに示したまえ」と言って思慮した。まさにその瞬間に、歯舍利は彼の蓮華のような手から弦月のごとく虚空に昇って美しき牟尼の王のお姿を化作しつつ濃い六色の光明を放ち、都をことごとく輝かせて驚くべき神変を示し、王を満足させて、再び虚空より戻り、彼の手にとどまった<sup>89</sup>。

<sup>84</sup> athābhayo mahārājā Duṭṭhagāmaṇi vissuto

Elāraṃ Coḷiyaṃ jivā pālesi lokasānaṃ./ Cv. ch.82. v.22.

<sup>85</sup> Cv. の第二編纂部分より、スリランカ北部のラージャラッタ (Rājaraṭṭha) はパティッターラッタ (Patiṭṭharaṭṭha) に呼称が変化している。

<sup>86</sup> Mahāvijayabāhu pi atho Coḷiyadāmiḷe

palāpetvāna yuddhamhi pālayi lokasānaṃ./

idāni pi vihārādiṃ sāsanaṃ cāpi satthuno

nāsetvā' dhiwasantetaṃ Patitṭharaṭṭhaṃ uddhate/

Damiḷe Māgharājaṃ ca Jayabāhuṃ c' ime duve

jivā vaḍḍhayituṃ lokasānaṃ patthayāma' ahaṃ./

etaṃ pi vacanaṃ saccaṃ Cv. ch.82. vv.25–28.

<sup>87</sup> ajivamāne sambuddhe samuppannā mahiddhikā

Dhammasokādayo bhūpā vividhaṃ pāṭihāriyaṃ/

abhinimmitasambuddharūpādiṃ avalokiya

akaruṃ saphalaṃ sammā jivitaṃ tu sakaṃ sakaṃ/ Cv. ch.82. vv.30–31.

<sup>88</sup> tadāppabhūti yāvajja nāthakass' ānubhāvato

sārīrikā ca yā santi yā santi pāribhogikā,/

tā sabbā dhātuyo loke pāṭihiraṃ karont' idha. Cv. ch.82. vv.34–35.

cetiya は、sarīra-cetiya, paribhoga-cetiya, uddissa-cetiya に分類される。最も重要なのは sarīra-cetiya で

ある。paribhoga-cetiya には、仏陀の使用した鉢や、菩提樹などが含まれる。仏像は uddissa-cetiya に含

まれるが、その崇拜がなされたのは、前二者よりかなりあとのことである。Jā. IV. p.228, Dh-p-a. III. p.251.

(仏像 (paṭimā) に関する言及は Pj. I. p.171, Mp. II. pp.6–7.) Adikaram [1946] p.135, 141, Rahula [1956]

pp.124–128.

<sup>89</sup> sace antogadho homi saddhāvantesu sabbathā

tesu pubbamahāvīrabhūpālesu ahaṃ pi ca,/

bhayānakamhi saṃgāme parasattuvimaddanaṃ

katvā sace karissāmi lokasānavaḍḍhanaṃ,/

dāṭhādhātu ayaṃ dāni pāṭihiraṃ subhaṃ mama

appeva nāma dasseyya, iti vatvā vicintayi./

tasmim yeva khaṇe dāṭhādhātu tassa karambujā

candalekheva ākāsaṃ abbhuggantvā, manoharaṃ/

munindarūpaṃ māpetvā, chabbaṇṇaghanaraṃsiyo

vissajjetvā, puraṃ sabbhaṃ obhāsetvāna, abbhutaṃ/

この歯舍利神変を見て、民衆、そして全サンガは、喝采し、讃嘆し、王に対して恭敬、畏怖、喜悅の念を抱き、愛情を抱くようになった<sup>90</sup>。以上の伝承を含む『チューラワンサ』第二の部分編纂時の、遅くとも14世紀には、仏教政権の正統性を示す存在は歯舍利であったことを、マハーヴィハーラ派が認めたことになろう。アヌラーダプラ時代初期にマハーヴィハーラのマハートゥーパがなした役割は、この時代は歯舍利が担うようになったといえよう<sup>91</sup>。

## 7 雨ごい儀礼

また歯舍利が降雨をもたらすものであるとの観念が、『チューラワンサ』においてはじめて、12世紀のパラッカマバーフ1世治下にあらわれている。パラッカマバーフ1世が歯舍利、鉢舍利に対する祝祭を行う直前に、大施の雨雲が来襲したが、祭典の場所には降雨なく、それ以外のあらゆる池沼河川をみだし地上の埃をしずませた<sup>92</sup>。大祭の主、パラッカマバーフ1世に対して、「これは善業 (puñña) である、これは智慧 (pañña) である、これは如来に対する信愛 (bhatti) である、これは名声 (yaso) である、これは威力 (tejo) である、これはすばらしい威光 (pabhāvātisaya) である<sup>93</sup>」などと驚嘆の言葉が発せられ、両舍利が感応して生じた不可思議なる大威神力 (mahānubhāva) に、祭典に参集した何百という人々の称賛が充満し<sup>94</sup>、これによりパラッカマバーフ1世は全世間の唯一の燈明 (sabbalokekadipa) たる地位を確立することになる<sup>95</sup>。

13世紀にはダミラ人の定住によりシンハラ人はスリランカ北部の主権を失い、シンハラ社会は北部の乾燥地帯から南部の湿潤地帯に移動せざるを得なかった。「このような地方においては、雨から生じるわずかな水でも、世間の助けとなさずして決して海に流してはならぬ<sup>96</sup>」という『チューラワンサ』の言葉に集約されているように、12世紀に存命したパラッカマバーフ1世は、スリランカ北部の乾燥地帯の平原において、多くのダム、水路、貯水池を建設、改修し、灌漑農業を支えてきた人物である<sup>97</sup>。南遷はそれら貯水システムの放棄であり、シンハラ社会全体が天水農業に頼らざるを得なくなったことを意味する。さらに古都アヌラーダプラを離れたシンハラ人にとって、歴史的な仏塔は、時間的にも空間的にもはるか遠ざかった。『チューラワンサ』においては、パラッカマバーフ2世

pāṭhīraṃ pakāsetvā, saṃtosetvā narādhipaṃ,  
ākāsā punar āgantvā tassa hatthe paṭiṭṭhahi./ Cv. ch.82. vv.38-43.

<sup>90</sup> Cv. ch.82. vv.44-45, ch.83. vv.1-3.

<sup>91</sup> マハートゥーパの舍利奉安の際の舍利神変については、Mhv. ch.31. vv.93-110. 藪内 [2020] pp.394-395.

<sup>92</sup> Cv. ch.74. vv.228-244.

<sup>93</sup> idaṃ puññaṃ ayaṃ pañña ayaṃ bhatti tathāgate,  
ayaṃ yaso ayaṃ tejo pabhāvātisayo ayaṃ/ Cv. ch.74. v.243.

<sup>94</sup> Cv. ch.74. vv.235, 241-242.

<sup>95</sup> Cv. ch.74. v.247.

<sup>96</sup> appakaṃ pīdise dese salilaṃ vuṭṭhisambhavaṃ  
vinā lokopakāreṇa jātu mā gañchi sāgaram/ Cv. ch. 68. v.11.

<sup>97</sup> Cv. ch.68. スリランカの最上カーストはゴイガマ (農耕民) である。

乾燥地帯 (ドライ・ゾーン) は、土地は平坦で陽光は十分にあり、シンハラ人たちは、大規模な灌漑システムを築き上げることにより、水不足を解消した。巨大な仏塔は、大きな貯水池や水路の建設と並行して建立されていた。しかし、その高い生産性を上げるようになった土地をめぐる、南インドの諸勢力との間に激しい争奪戦が繰り返されることにもなったのである。

中村 [1988] pp.31-32, 72. 濱谷 [1992a] pp.175-176, 濱谷 [1992b] p.322.

スリランカにおける仏塔建立の歴史については、Paranavitana [1946] pp.1-11.

治下、旱魃による飢饉の恐れという国難におちいった際、歯舍利を本尊として神々とともに祀り、雨ごいの儀礼を行っていることが伝承される。アヌラーダプラ時代には菩薩として祀られたナータ（観世音）やメッテッヤ（弥勒）が、ダンバデニヤ時代には神として礼拝され、歯舍利とともに祀られ、パリッタが唱えられた<sup>98</sup>。人々は信愛（bhatti）でもって歯舍利に対し、香や諸々の花や米や果物で供養した<sup>99</sup>。

王はまたその時、三宝、チエーティヤ、菩提樹、大神力ある供養を受けるべき最勝のナータ神やメッテッヤ神をはじめとする神々を種々さまざまな供養で（祀り）、全ランカー（島）をも一大祭典とさせ、供養を先にして全比丘サンガを一団とし、パリッタをも唱えさせ、大聖の歯舍利に都を正しく右繞させて、そのあとさらに「神よ、雨を降らせたまえ」とこのように彼は心を定めた。するとその時大雲があちこちからあらわれて、稲妻で何度もまさに光を放ちつつ…<sup>100</sup>

パラッカマバーフ 4 世（在位 1302–1326）治下のクルネーガラ時代には、シンハラ語の『ダラダーシリタ』が著され、歯舍利の儀礼の次第についての詳細がまとめられた。王はそれに準じて、日々の歯舍利供養を行った<sup>101</sup>。聖典言語のパーリ語ではなくシンハラ語で編纂されたということは、仏歯の重要性がより民衆に認識されてきたことを示唆していると思われる。

<sup>98</sup> Cv. ch.87. vv.1–6.

<sup>99</sup> Cv. ch.85. vv.33–36.

bhatti は Cv. ch.85. vv.70, 121. にもあらわれる。（Cv. ch.72. v.304 では saddhā が用いられている。）

アヌラーダプラ時代初期には舍利への供物は、花と燈明であった。Adikaram [1946] p.142.

舍利や菩提樹に食物を捧げるという慣習は初期のころには記されていないが、アヌラーダプラ時代後期の 10 世紀から 11 世紀と年代付けられる碑文には、バマグル寺院の仏堂と菩提樹に玄米を供養したことが記されている。EZ. III. pp.190–191.

<sup>100</sup> rājā pana tadā vatthuttayacetiyabodhinam  
nāthametteyyadevādevānam★ ca mahiddhinam/

★ devādevānam の誤植であることが指摘されており（Buddhadatta [1957] p.85）、これに従う。

nānāvīdhāhi pūjāhi pūjaneyyānam uttamam

kārāpetvāna sabbam pi Lañkam ekam mahussavam/

ekikatvā mahābhikkhusamgham pūjāpurassaram

parittam pi bhaṇāpetvā, dāṭhādhātum mahesino/

puram padakkhinam sammā kārāpetvā tato puna

devo vassatu iccevam adhiṭṭhānam akāsi so./

Tadā pana mahāmeghā vuṭṭhahantā tato tato

vijjullatāhi daddallamāna eva punappunam/ Cv.ch.87. vv.3–7.

アヌラーダプラ時代においても、比丘たちによるパリッタ儀礼がおこなわれているが、本尊は歯舍利ではない。ウパティッサ 1 世（在位 368–410）の治下には、ガンガーローハナ（Gangārohaṇa）の故事に因んで、金の仏像と石の鉢舍利が使用されて街中で行進された（Cv. ch.37. vv.189–198）。セーナ 2 世（在位 853–887）の治下では、アーナンダ像が用いられた（Cv. ch.51. vv.79–81）。他アッガボーディ 4 世（在位 667–683）（Cv. ch.46. v.5）、カッサパ 5 世（在位 914–923）（Cv. ch.52. v.80）の治下にパリッタが行われている。パリッタ儀礼、及び神々を取り入れたシンハラ仏教の体系については、藪内 [2012]。

歯舍利を本尊とした雨ごい儀礼が、アヌラーダプラ時代におこなわれていた可能性はあるが、歯舍利の管理がアバヤギリであったため、伝承されていないとも考えられる。

メッテッヤとナータについては、藪内 [2009] pp.371–375, 383–384。パーリ文献に見られる弥勒菩薩、観世音菩薩については、森 [2016] 第一篇、第二篇。

<sup>101</sup> Cv. ch.90. vv.78–79.

## 8 おわりに

本論では、主に『チューラワンサ』における歯舎利の伝承を検討し、マハーヴィハーラ派から捉えた歯舎利の位置づけをみてきた。碑文によれば、王の歯舎利による灌頂は、ポロンナルワ時代、ヴィジャヤパーフ1世（在位 1055-1110）治下におこなわれていることが確認される。しかし、もとアバヤギリ派と関連して統括管理されていた歯舎利を、マハーヴィハーラ派が王権の象徴とみなすのは、全サンガがマハーヴィハーラ派の受戒で統合されたパラッカマバーフ1世以降ということになる。パラッカマバーフ1世以降も、もとアバヤギリの寺院組織であったウッタロームーラが歯舎利の管理に関係していたとみられるが、13世紀、ダンバデニヤ時代のパラッカマバーフ2世（在位 1236-1270）治下には、侵略の危機に瀕し、歯舎利に関連した以前の宗派意識は薄らいでいたといえよう。13世紀以降、大塔が存在するスリランカ北部ラージャラッタを放棄せざるを得なくなったシンハラ人仏教徒にとって<sup>102</sup>、王宮の近くの祠堂に祀られて移動可能な歯舎利は、王を中心として、全サンガ、民衆を結束させる中心的存在となった。ダミラ人との戦闘に際して、歯舎利はナショナリズムを喚起するものであるようにも伝承されているが、実際にはシンハラ人对ダミラ人という全面的な民族的戦闘というわけではない。マーガ（在位 1215-1236）の侵略の際、ワーチッサラ長老たちは、南インドなどに避難の地を求め、パラッカマバーフ2世治下においても、王はチョーラ出身の長老を招いてサンガ改革を実施したことが『チューラワンサ』には伝承されている<sup>103</sup>。さらにこの頃から、スリランカの上座仏教は、王室を介して東南アジア諸国と交流する機会が増えていくことになる<sup>104</sup>。

アヌラーダプラのマハートゥーパ建立の伝承の際には、建立に携わった多数の人々が喜びを感じ（pasanna）、浄信（pasāda）でもって善趣に導かれる様子が描かれていた<sup>105</sup>。しかし、13世紀、戦闘の合間におこなわれた新都ダンバデニヤでの祭祀において、あらたな地で生活の基盤を築かなければならなかった民衆の1本の歯舎利に託した願いは、干ばつ

<sup>102</sup> パラッカマバーフ2世は、その治世中に二回灌頂式を執り行っている。最初のものは父、ヴィジャヤパーフ3世より王位継承をした際、ダンバデニヤにおいてであり（Cv. ch.82. v.2）、二回目はパラッカマバーフ2世がすでに退位後、ポロンナルワにおいて息子のヴィジャヤパーフ4世（在位 1270-1272）によって執り行われた（Cv. ch.89. v.10）。パラッカマバーフ2世が灌頂式をやり直したということは、ポロンナルワを王室の権力の基盤とみなし、ポロンナルワで即位することを望んでいたからである（Cv. ch.87. v.70）。これはポロンナルワ近郊におけるダミラ人に対する勝利の認識を意味することになる。アヌラーダプラにおける房舎（pirivena）の建立とその寄進（EZ. III. pp.286-288）、ラタナーワリチューティヤ（マハートゥーパ）の修復のはじまりはおそらくこの頃からであろうが（Cv. ch.88. v.83）、修復は中断されている。スリランカ北部の支配を阻止する敵対的な要素があったと考えられる。パラッカマバーフ2世死後に即位した息子のヴィジャヤパーフ4世は、スリランカ島内すべてを統治していた『チューラワンサ』には伝承されるが、即位2年にして將軍により暗殺されている（Cv. ch.90. vv.1-3）。当時北部は、『チューラワンサ』の伝承に反してシンハラ人の統治下でない可能性があることについては、藪内 [2009] pp.333-338。『チューラワンサ』が最後にポロンナルワに言及するのは、パラッカマバーフ3世（在位 1287-1293）の治世下においてである（Cv. ch.90. vv.55-56）。アヌラーダプラについては、シリヴィジャヤラージャシーハ（在位 1739-1747）の治世まで何も伝承されていない（Cv. ch.98. v.85）。キッティシリラージャシーハ（在位 1747-1781）がアヌラーダプラの聖地に赴き、供養をおこなったことが伝承されるが（Cv. ch.99. v.36）、19世紀に至るまでアヌラーダプラは荒廃し、密林の中に埋もれることになる。Nissan [1988] pp.260-266。

<sup>103</sup> Cv. ch.81. vv.20-21; ch.84. vv.9-10.

ダミラ人と仏教信仰については、藪内 [2009] pp.313-314, 382.

<sup>104</sup> 藪内 [2014] .

<sup>105</sup> *Mhv.* ch.30, vv.42-43.

から生じる諸々の難を封じる降雨であり、生きるためのより現実的な希求であったといえよう。『マハーワンサ』編纂時には、模範的な王は、「信仰 (saddhā) の徳を飾りとする賢者<sup>106</sup>」と表現されたが、パラッカマバーフ 1 世以降、王や人々の舍利に対する供養の心は、信愛 (bhatti) という言葉でも表現されるようになった<sup>107</sup>。

13 世紀以降、ダミラ人の流入とあいまって、ヒンドゥー教と仏教の融合はますます進んだといえよう。神と舍利を同時に供養する描写が『チューラワンサ』にあらわれ<sup>108</sup>、かつて菩薩として礼拝されたナータ (観世音) やメッテッヤ (弥勒) が、神とみなされて仏教儀礼に組み込まれた。また仏陀が「神中の神 (devadeva<sup>109</sup>)」とも表現されている。現在のスリランカにおいて、仏歯を祀るダラダー・マーリガーワはキャンディ (マハヌワラ) 市内に位置している。日本では仏歯寺と称されることが多いが、この名称は、仏歯 (ダラダー) と宮殿 (マーリガーワ) とを合成したものであって、一般に「寺院」の意味で用いられる「ヴィハーレ」ということばは含んでいない。キャンディ市でダラダー・マーリガーワは街の最東端におかれているが、インドと同様にスリランカでも、東が最高神インドラの方向であると認識されているからである<sup>110</sup>。

#### 〈引用文献〉

##### 〈欧文〉

Adikaram, E. W.

[1946] *Early History of Buddhism in Ceylon*, Colombo: M. D. Gunasena.

Berkwitz, Stephen C.

[2004] *Buddhist History in the Vernacular — The Power of the Past in Late Medieval Sri Lanka* —, Brill.

Buddhadatta, A. P.

[1957] *Corrections of Geiger's Mahāvamsa etc*, The Ananda Book Company.

Cartman, James

[1957] *Hinduism in Ceylon*, Colombo: M. D. Gunasena.

Geiger, Wilhelm

[1930] “The Trustworthiness of the Mahāvamsa”, *The Indian Historical Quarterly*, 6-2, pp.205–228.

Gornall, Alastair

[2020] *Rewriting Buddhism — Pali Literature and Monastic Reform in Sri Lanka, 1157–1270*, UCL Press.

Gunawardana, R. A. L. H.

<sup>106</sup> matimā saddhāguṇālaṃkato *Mhv.* ch.30. v.100.

<sup>107</sup> Cv. ch.74. v.243; ch85. vv.33, 70, 121.

<sup>108</sup> Cv. ch.87. vv.3–4.

<sup>109</sup> Cv. ch.82. v.17. devātideva とも表現されている (Cv. ch.85. v.119).

<sup>110</sup> 杉本 [1988] p.182.

16 世紀から 19 世紀にかけて、西欧人がどのように歯舍利に相對したのかについては、Strong [2021] . 現代のペラヘラ祭については、Holt [2017] pp.93–130.

- [1979] *Robe and Plough: Monasticism and Economic Interest in Early Medieval Sri Lanka*, Tucson: The University of Arizona Press.
- Hettiaratchi, D. E.  
[1960] “Civilization of the Period (Continued): Literature and Art”, in *University of Ceylon, History of Ceylon*, vol.I ed. by Nicholas Attygalle et al., Ceylon University Press, pp.770–793.
- Herath, Dharmaratna  
[1994] *The Tooth Relic and the Crown*, Gunaratne Offset Ltd.
- Holt, John Clifford  
[2017] *Theravada Traditions*, University of Hawai’i Press.
- Hocart, A. M.  
[1931] *The Temple of the Tooth in Kandy, Memoirs of the Archaeological Survey of Ceylon*, vol.IV, Messrs Luzac & Co.
- Law, B. C. [1947] *On the Chronicles of Ceylon*, Royal Asiatic Society of Bengal.
- Liyanagamage, Amaradasa  
[1968] *The Decline of Polonnaruwa and the Rise of Dambadeniya (circa 1180–1270 A.D.)*, Department of Cultural Affairs, Colombo.
- Malalasekera, G. P.  
[2010] *Pali Literature of Ceylon*, revised edition, Bharatiya Kala Prakashan.
- Nicholas, C. W.  
[1960a] “Liberation from the Cola Yoke”, in *University of Ceylon, History of Ceylon*, vol.I ed. by Nicholas Attygalle et al., Ceylon University Press, pp.417–427.  
[1960b] “The reign of Vijayabāhu I”, in *University of Ceylon, History of Ceylon*, vol.I ed. by Nicholas Attygalle et al., Ceylon University Press, pp.428–437.
- Nicholas, C. W. & S. Paranavitana  
[1961] *A Concise History of Ceylon*, Ceylon University Press.
- Nissan, Elizabeth  
[1988] “Polity and Pilgrimage Centres in Sri Lanka”, *Man* (N.S.), 23 pp.253–274.
- Panabokke, Gunaratne  
[1993] *History of the Buddhist Sangha in India and Sri Lanka*, Karunaratne & Sons Ltd.
- Paranavitana, S.  
[1946] *The Stūpa in Ceylon, Memoirs of the Archaeological Survey of Ceylon*, vol.V, Colombo: The Ceylon Government Press.  
[1960] “Civilization of the Polonnaru Period (Continued): Religion, Literature and Art”, in *University of Ceylon, History of Ceylon*, vol.I ed. by Nicholas

Attygalle et al. Ceylon University Press, pp.563–612.

Pathmanathan, S.

[1982] “Kingship in Sri Lanka: A.D.1070–1270”, *The Sri Lanka Journal of the Humanities*, 8-1 & 2, pp.120–145.

Perera, L. S.

[1959] “The Sources of Ceylon History”, in *University of Ceylon, History of Ceylon* ed. by Nicholas Attygalle et al., Ceylon University Press, pp.46–73.

Rahula, Walpola

[1956] *History of Buddhism in Ceylon*, M. D. Gunasena & Co.

Scheible, Kristin

[2016] *Reading the Mahāvamsa — The Literary Aims of a Theravāda Buddhist History* —, Columbia University Press.

Seneviratna

[2010] *Śrī Daḷadā Māligāva, The Temple of the Sacred Tooth Relic*, vol.I, History and Architecture of the temples, revised edition, Vijitha Yapa Publications.

Strong, John S.

[2004] *Relics of the Buddha*, Princeton University Press.

[2021] *The Buddha’s Tooth*, The University of Chicago Press.

Walters, Jonathan S.

[2000] “Buddhist History : The Sri Lankan Pāli Vamsas and Their Community”, in *Querying the Medieval*, ed. by Ronald Inden, Jonathan Walters, and Daud Ali Oxford, pp.99–164.

#### 〈邦文〉

橘堂正弘

[1997] 『スリランカのパーリ語文献』 山喜房佛書林.

[2002] 『現代スリランカの上座仏教教団—アマラプラ派とラーマンニャ派の存在形態の研究—』 山喜房佛書林.

杉本卓洲

[1984] 『インド仏塔の研究』 平楽寺書店.

[1990] 「パーリ文化と美術—上座部と仏塔崇拜」『水野弘元博士米寿記念論集 パーリ文化学の世界』 春秋社, pp.201–220.

杉本良男

[1988] 「シンハラ仏齒論」小川正恭・渡邊欣雄・小松和彦編『社会人類学の可能性 II 象徴と権力』 弘文堂, pp.180–199.

鈴木正崇

[1996] 『スリランカの宗教と社会—文化人類学的考察—』 春秋社.

中村尚司

[1988] 『スリランカ水利研究序説』 論創社.

濱屋悦次

[1992a] 「スリランカの歴史と植物資源 (1)」『農業技術』 47-4, pp.175–179.

[1992b] 「スリランカの歴史と植物資源 (4)」『農業技術』 47-7, pp.320–325.

森祖道

[1984] 『パーリ仏教註釈文献の研究—アッタカターの上座部的様相—』 山喜房佛書林.

[2015] 『スリランカの大乗仏教—文献・碑文・美術による解明—』 大蔵出版.

- 藪内聡子 [2009] 『古代中世スリランカの王権と佛教』 山喜房佛書林。  
 [2012] 「シンハラ仏教徒のパリッタ儀礼と神々」 立川武蔵編 『アジアの仏教と神々』 法蔵館, pp.20-41。  
 [2014] 「教団形成と地域展開：東南アジアにおける展開」 末木文美士・下田正弘・堀内伸二編集 『仏教の事典』 朝倉書店, pp.81-88。  
 [2020] 『マハーワンス』 にみられる舍利・仏塔信仰 宮治昭・福山泰子責任編集 『アジア仏教美術論集 南アジア I マウリヤ朝～グプタ朝』 中央公論美術出版, pp.387-414。

〈使用テキスト〉

- Cūlavamsa*, 2 vols. ed. by Geiger, Wilhelm, London: PTS, 1925-1927.  
*Dhammapadaṭṭhakathā*, 5 vols. ed. by Norman, H. C. et al., London: PTS, 1906-1915.  
*Dāṭhāvamsa*, ed. by Rhys Davids, T. W., J.P.T.S., 1884, pp.109-151.  
*Dāṭhāvamsa*, ed. & tr. by Law, Bimala Charan, Moti Lal Banarsi Das, 1925.  
*Dīgha-Nikāya*, 3 vols. ed. by Rhys Davids, T. W. and J. E. Carpenter, London: PTS, 1889-1911.  
*Hatthavanagallavīhāravamsa*, ed. by Godakumbura, C. E., London: PTS, 1956.  
*Jātaka*, 6 vols. ed. by Fausbøll, V., London: PTS, 1877-1896.  
*The Katikāvatas*, ed. by Ratnapala, Nandasena, München: Mikrokopie, 1971.  
*Mahāvamsa*, ed. by Geiger, Wilhelm, London: PTS, 1908.  
*Mahāvamsa*, tr. by Geiger, Wilhelm, London: PTS, 1912.  
*Manorathapūraṇī*, 5 vols. ed. by Walleser, Max and Hermann Kopp, London: PTS. 1924-1957.  
*Paramatthajotikā I*, (*The Khuddaka-Pāṭha together with its Commentary Paramatthajotikā I*) ed. by Smith, Helmer, London: PTS, 1915.  
*Rājāvaliya*, tr. by Gunasekara, B., Colombo: George J. A. Skeen, 1900.  
*Vinaya Piṭaka*, 5 vols. ed. by Oldenberg, H., London: PTS, 1879-1883.

〈碑文資料〉

- Epigraphia Indica*, Calcutta & Delhi: Archaeological Survey of India, 1892-  
*Epigraphia Zeylanica*, London & Colombo: Archaeological Department, 1904-

〈略号〉

- Cv. *Cūlavamsa*  
 Dhp-a *Dhammapadaṭṭhakathā*  
 Dāṭh. *Dāṭhāvamsa*  
 DN. *Dīgha-Nikāya*  
 EI. *Epigraphia Indica*  
 EZ. *Epigraphia Zeylanica*  
 Hvv. *Hatthavanagallavīhāravamsa*  
 Mhv. *Mahāvamsa*

*Mp.*      *Manorathapūraṇī*  
*Pj.*      *Paramatthajotikā*  
*Rjv.*      *Rājāvaliya*  
*Vin.*      *Vinaya Piṭaka*  
大正蔵      大正新脩大蔵経  
J.P.T.S.      *Journal of the Pali Text Society*  
PTS      The Pali Text Society

〈Keywords〉      *Cūlavamsa*, 齒舍利, 王権, サンガ

やぶうち さとこ      東洋大学非常勤講師

## The Tooth Relic of the Buddha in the *Cūlavamsa*: Its Relationship to Kingship and the Buddhist Saṅgha from the Anurādhapura Period to the Daṁbadeṇiya Period

YABUUCHI, Satoko

This article examines the tradition of the tooth relic of the Buddha as described mainly in the *Cūlavamsa* and it considers the relic's relationship to kingship and the Buddhist saṅgha in the view of the Mahāvihāra Nikāya from around the 4th century A.D. in the middle of the Anurādhapura period to the 13th century A.D. in the Daṁbadeṇiya period.

The tooth relic of the Buddha was brought from Kalinga to Sri Lanka by a Brahmin woman at the beginning of the 4th century A.D. during the reign of Sirimeghavanna (303–331A.D.) in the Anurādhapura period. The woman probably first came into contact with the monks of the Abhayagiri Nikāya, so it then took custodianship of the tooth relic. The tooth relic had been kept in a special building within the city beside the King's palace and for which a religious service was held by successive monarchs.

As the capital shifted, the temple of the tooth relic also relocated. According to several inscriptions, Vijayabahu I (1055–1110 A.D.) was the first king to be coronated in the temple of the tooth relic during the Polonnaruva period. The tooth relic had been overseen by the Abhayagiri Nikāya, but once the entire Buddhist saṅgha was unified under the ordainship of the Mahāvihāra Nikāya after the reign of Parakkamabāhu I (1153–1186 A.D.), the Mahāvihāra Nikāya came to regard the possession of the tooth relic as the symbol of the kingship. The Uttaramūla, an offshoot of the Abhayagiri Nikāya, was still involved in overseeing the tooth relic after the reign of Parakkamabāhu I, but sectarian attitudes regarding the relic gradually subsided. The detailed tradition of the arrival of the tooth relic was presumably preserved by the Abhayagiri Nikāya, but the *Dāṭhāvamsa*, the historiography of the tooth relic, was compiled by Dhammakitti, the rājaguru at that time, in the beginning of the 13th century. The tooth relic was regarded as an important object for veneration by the entire Buddhist saṅgha.

Starting in the 13th century during the Daṁbadeṇiya period, as Damilas settled in the northern part of Sri Lanka and the capital of Sinhala society shifted southward, Sinhala Buddhists were forced to move from the north, where many ancient Buddhist cetiyas remained. The tooth relic, which was portable and enshrined near the royal palace, gained supremacy in the religious and political fields, uniting all of the saṅgha and the people around the king. The relic of the Buddha has been viewed as the Buddha himself throughout history, and the tooth relic came to play the same role in the Daṁbadeṇiya period as the Mahāthūpa did in the Anurādhapura period, as portrayed in the *Mahāvamsa*.